児童期における自己評価と親子相互作用

——「意見尊重的態度」に関する分析から

The relationship of self-esteem and parent-child interaction in middle childhood:
An analysis of attitudes on mutual respect

眞榮城 和美

白百合女子大学
大学院文学研究科

藤森 秀子

横浜市立脳血管
医療センター

八木下 暁子

東京都立大学大学院

菅原 ますみ

国立精神・神経センター

北村 俊則

熊本大学医学部

問 題

児童期は義務教育の開始に伴って課題学習的活動が増加することにより、他者からの評価を受ける機会も増す時期である。その中で、子どもたちは自己に対するまなざしを変化させていくものと考えられている(梶田, 1988)。また、他者の有能さについての客観的な評価に伴い、劣等感が高まりやすく、自己評価が低下する傾向の強い時期である(Erikson, 1950)ことから、児童期における自己評価の発達に関連する要因に注目することは、子どもが著しく自己評価を低下させることなく、社会に対する自己の主体性を形成していく手がかりを得る上で重要な視点であると考えられる。

児童期における自己評価の発達に重要なかわりを持つ要因は数多く存在するが、特に、親の養育態度との関連性は注目され続けているものであり、母親の受容的、自律性尊重的な養育態度が子どもの自己評価を高めるという結果が示されている(森下, 1988)。また、男子は母親に受容されていると認識できることが、女子は母親から自律性を尊重されていると認識できることが自己評価を高める(Kawash, Keer & Clewes, 1985)、という報告があるように、母子関係と子どもの自己評価の関連においては性差があることも認められている。しかしながら、父子関係と子どもの自己評価の発達との関連を検討したものは少なく、性差の検討を行うためには、父子関係にも焦点を当て、親子性別組み合わせによる違いを検討する必要があるものと考えられる。また、親の養育態度のみに焦点を当てるのではなく、子どもの主体的な態度を検討するためにも、質問紙法による調査研究に加え、より実際の親子の相互作用に注目することが求められているものと思われる。そこで本研究においては、VTRを用いた行動観察を行い、子どもの自己評価と関連が認められる親子相互作用について検討することとし、特に、実際の討論場面において、子どもと親の双方に見られる受容的・自律尊重的態度の指標として「相手の意見を尊重する態度」に焦点を当て、親子性別組み合わせによる違いに注目した検討を試みた。

方 法

調査対象者および手続き

1984年8月に神奈川県K市市立病院産婦人科で対象児を出産した家族について開始された縦断的研究(Kitamura, Sugawara, Sugawara, Toda & Shima, 1996; 菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999)に登録されている被験

者のうち、出産後11年目の追跡調査に応じた313家族(母親386名、父親325名、子ども400名)を対象とした。なお、本研究における質問紙分析対象児は384名(男子188名、女子196名)、平均年齢は10.52歳(9歳～11歳)であり、著しい発達の遅れや、発達障害等は認められなかった。質問紙は郵送によって配布・回収(対象615家族、回収率62.6%)され、調査期間は、1996年7月～1997年8月であった。

質問紙調査に回答した313家族の中で、直接行動観察に応じた66家族に対し、行動観察課題を行った。2家族については、時間の制約から親子相互作用の観察が完了できなかったため、調査対象から除外し、男児35名、女児29名(平均年齢10.19歳)とその両親(父親の平均年齢41.68歳、母親の平均年齢38.54歳)の計64家族を分析の対象とした。行動観察調査期間は1996年8月～1997年4月であった。

子どもの自己評価の測定

児童期における自己評価を測定する代表的な尺度の1つであるSelf-Perception Profile For Children(Harter, 1985)を翻訳して用いた。原尺度は6領域36項目から構成されているが、今回の研究では各領域から3項目ずつ計18項目を使用した。この尺度は「運動能力」・「学業能力」・「容姿」・「友人関係」・「品行」・「全体的自己価値感(自己受容感)」(「スポーツならなんでもよくできる」・「学校の勉強がとてよくできる」・「自分の身長と体重にまんぞくしている」・「たくさんの友達がいる」・「とてもおぎょうぎがよい」・「自分のような人が好きだ」他12項目)を測定する項目から成り立っている。評定方法は「はい」「少しはい」「少しいいえ」「いいえ」の4段階であった。

本研究においては、各側面別自己評価ではなく、より大きな意味での自己評価の検討を目的としていることから、解析には18項目の総合得点を用いることとした。Harter(1985)の先行研究から、6領域間の内部相関は.28～.67であり、おおむね中程度以上の関連性があることが確認されている。本研究のサンプルについて、各領域の相関関係を確認したところ、どの領域においても「全体的自己価値感(自己受容感)」との相関関係が.22～.75の間で認められた。また、これら18項目の信頼性を算出したところ、 $\alpha = .80$ という値が得られ、一次元性を確認することができたので、18項目を加算した得点を総合的な自己評価指標として分析に使用した。

親子相互作用の観察

家族の日常場面にできるだけ近い実験状況を設定するた

めに、都内の家具付き 3LDK マンションを観察施設として家族相互作用の直接観察を実施した。また、両者の表情を捉えるために、デジタルビデオカメラ 2 台（サイド及びフロント）を設置し、VTR 録画を行った。課題は Social Support Interaction Coding System (Bradbury & Pasch, 1994) に基づき、親子の一方による個人的な悩み事の開示（当該 2 者間の関係に関する悩みは除く）に対してもう一方がアドバイスするという討論場面を設定した（課題遂行時間は各 5 分間）。本研究においては録画された以下の 4 場面を分析の対象とした。1. 子どもが母親に対して悩み事を相談する場面（子→母の自己開示場面）。2. 母親が子どもに対して悩み事を相談する場面（母→子の自己開示場面）。3. 子どもが父親に対して悩み事を相談する場面（子→父の自己開示場面）。4. 父親が子どもに対して悩み事を相談する場面（父→子の自己開示場面）。

分析手続き

VTR を再生し、前述の 4 場面に対する評定を行った。今回の分析では親子相互に見られる相手の意見を尊重する態度（「意見尊重的態度」）に焦点を当て、「意見を尊重している」～「意見を尊重していない」までの 5 段階で評定を行った。なお、本研究で焦点を当てた「意見尊重的態度」とは、具体的には「そうだね」「そう思う」「そうしよかな」などの相手の意見に同意を示す言語的反応、及び、相手の意見に対して「聞く」などの相手の意見を尊重する非言語的反応を対象とした。

評定は 5 名の評定者（女性）がランダムに 2 名一組となり実施した。評定者間の一致度（評定者間相関）は $r = .70 \sim .87$ であった。各場面についての親子相互の「意見尊重的態度」の評定値を以降の分析に用いた。

結 果

結果はすべて SPSS 統計パッケージを用いて分析された。子どもの総合的自己評価と親子相互の意見尊重的態度との関連

- 1) 場面 1（子→母の自己開示場面）では、男子の総合的自己評価と「子→母の意見尊重的態度」との間に中程度の正の相関が認められた（Table 1 参照）。
- 2) 場面 2（母→子の自己開示場面）では、男子の総合的自己評価と「母→子の意見尊重的態度」・「子→母の意見尊重的態度」との間に中程度の正の相関が認められた（Table 2 参照）。
- 3) 場面 3（子→父の自己開示場面）、場面 4（父→子の

Table 1 子→親の自己開示場面における子どもの総合的自己評価と親⇄子の意見尊重的態度との関連

		意見尊重的態度			
		母→子	子→母	父→子	子→父
総合的 自己評価	男 子 ($n=35$)	.21	.42**	.15	.07
	女 子 ($n=29$)	-.27	.19	-.07	.04

** $p < .01$

Table 2 親→子の自己開示場面における子どもの総合的自己評価と親⇄子の意見尊重的態度との関連

		意見尊重的態度			
		母→子	子→母	父→子	子→父
総合的 自己評価	男 子 ($n=35$)	.42*	.45*	.21	.11
	女 子 ($n=29$)	-.32	.26	-.26	-.02

* $p < .05$

自己開示場面）では、男女ともに総合的自己評価と親子相互の意見尊重的態度との間に関連が認められなかった（Table 1, 2 参照）。

考 察

児童期における自己評価と親子相互の意見尊重的態度との関連に焦点を当てた分析の結果、男子の自己評価の高さと関連の得られた母子相互作用は、「お互いの意見を尊重し合えること」であった。つまり、母親が子どもの意見を尊重する態度を示すことが男子の自己評価を高める作用を持つと同時に、自己評価の高い男子は母親の意見を尊重することができるという、子どもの態度に主体性が認められたものと考えられる。一方、女子の自己評価の高さと母子相互作用との関連は認められなかった。この結果は、先行研究 (Kawash et al., 1985) にて報告されているように、母子相互作用と子どもの自己評価との関連における性差を示唆するものと言えよう。このような性差が生じた背景には様々な要因が存在するが、その 1 つとして、母－息子関係、母－娘関係における質的な違いを挙げることができるのではなかろうか。さらに本研究においては、母子相互作用のみならず、子どもの自己評価と父子相互作用との関連を検討した。しかしながら、男女ともに関連は得られなかった。これは、男子の自己評価を高める親子相互作用として、父子相互作用以上に母子相互作用の重要性が示された結果であると捉えることができよう。但し、今回の分析は親子相互に見られる意見尊重的態度のみに焦点を当てたものであるため、今後は、さらに詳細な親子の対話分析を行い、多様な非言語的相互作用にも注目することにより、子どもの自己評価を高める親子相互作用について検討していく必要があるものと考えている。

引用文献

- Bradbury, T. N., & Pasch, L. A. 1994. *Social support interaction coding system*. Unpublished coding manual, University of California, Los Angeles.
- Erikson, E. H. 1950. *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
- Harter, S. 1985. *Self perception profile for children*. University of Denver, CO.
- 梶田 敏一 1988. 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Kawash, G. F., Keer, E. N., & Clewes, J. L. 1985. Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, **119**, 235-242.
- Kitamura, T., Sugawara, M., Sugawara, K., Toda, M., & Shima, S. 1996. A psychosocial study of depression in early pregnancy. *British Journal of Psychiatry*, **168**, 732-738.
- 森下正康 1988. 児童期の母子関係とパーソナリティの発達 心理学研究, **31** (1), 60 - 75.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井隆代 1999. 子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断的研究から 発達心理学研究, **10** (1), 32 - 45.

－ 2000. 7. 24. 受稿, 2001. 7. 6. 受理 －